
無限の魂を持つ転生者

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の魂を持つ転生者

【Nコード】

N0780W

【作者名】

まりも

【あらすじ】

なんかもうお約束通りに死んだ主人公。

神様にもらった能力は魂の塗り替え。

送られた世界で新しい生を送る主人公はどのように生きるのか？

無限の魂を持つ転生者。 始まります。

プロローグ（前書き）

こんにちは。まりもです。

至らぬ点ばかりですが、ご容赦を。

プロローグ

死んだ・・・orz

そう思ったのは、ついさつき。

複数の男に囲まれていた女性を北斗神拳もどき（爆発しない）で倒したとき、

後ろで銃声が聞こえ、左胸に熱い痛みが走ったときだった。

心臓の最後の鼓動によって血液が俺の脳を通り過ぎるまでの間、

俺が唯一脳裏に映せたのは、死んだ・・・orzだった。

あ、俺死んだんだ・・・orz

そう確信したのは三秒ほど前。

目が覚めたと思ったら目の前に長いひげのじーさんが居たときだ。

よく二次小説を読んでいた俺は、瞬時に予測することが出来た。

・・・テンプレ？・・・と。

はい！やっぱりテンプレでした！

なるほど。あの弾は横の女性を狙ったものだったらしい。

しかもあの女性は、実はヤクザのボスって・・・。助けなきゃよかった。

「で、爺さん。どうするんだ？これから。」

「ふむ。お主にはアニメやマンガ・・・つまり二次元の世界に行ってもらう。」

残念じゃがどの世界かは選択できん。すまんの。わしも、全知全能ではないのじゃ。」

へー。神様って言ってもいろいろあるんだな。

「力とかってもらえるのか？」

「うむ、一つだけじゃが、何でもいいぞ。」

「ふむ。・・・じゃあ。」

俺が生前考えた奴を言ってみる。

「じゃあ、魂の塗りかえで。」

「ふむ、どついう能力じゃ？」

「俺という魂を塗り替える能力。対象は俺が知っているアニメ、漫画、小説の全キャラクター！。」

俺という魂の上にキャラの魂をかぶせる。たとえばのび○を選択した場合、俺の魂をの○太の魂で覆う。

すると外見は俺でも、中身。つまり、思考も性格も動きも○び太って分け。」

「なるほどな。」

「それと、そのキャラは俺の多重人格ってかんじにしてくれ。」

あと、塗り替え中はそのキャラの能力、武器も使用可能に。

記憶は完全に共有。これで塗り替えていても俺の目的などがキャラに伝わる。」

「わかった。あと、わしからの好意で、魔力は多めにしておいてや

ろっ。」

「ああ、ありがとう。魔力がなかったら何にも出来ないからな。」

「じゃあ能力をつけるぞ……。えいやっ！……これでいいはずじゃ。」

早ッ！？めっちゃ簡単そうにやったよ。この人。いや、神様。

「じゃあ早速……。だれにしようか……。？じゃあセイバーで。」

イメージイメージっと。あ、体の感覚が……。

「神様。お腹がすきました。……む。……なるほどね。」

「どっじゃ？」

「塗り替え中も意識はあるんだな。ちゃんと記憶も共有されてるみたいだし。」

神様って言ったしね。

「でもさ、何でこんなに親切なわけ？」

「……じつは、お前はある実験のために転生させられる。」

「あっ。」

「アニメの世界に、転生者を送るとどうなるか……という実験じや。」

お主には好きに生活してもらってかまわんのじゃが、永遠にアニメの世界をまわることになる。

つまり、お主には無数のアニメの世界すべてに行ってもらわねばならんのじゃ。永遠に。」

なるほど。そういうことか。

「別にいいさ。俺は全部楽しんで生きていくから。」

「……ありがとうの。じゃあ、世界に送るぞ。最初の世界だけなら、選択できるぞ。」

「まじ？じゃあ……ネギまで。」

「ホントにいいんじゃない？」

「いいよ。出来れば時代は赤き翼が大暴れする少し前ぐらいで頼む。」

「わかった。本当にすまんの。この通りじゃ。」

そついつて爺さんは頭を下げる。

「ちょっと！？頭を上げてくれよ。別にいいからさ。」

「……わかった。では、永遠の人生を楽しんでこい。」

爺さんの言葉と共に扉が現れる。

眩い光を放つその扉に、俺、サイトウキリヤ斎藤霧弥は足を踏み入れた。

プロローグ（後書き）

さて、頑張らないと。

あ、使うキャラなどのアイデアをくれると嬉しいです。

ご飯の恨み。そしてバグ認定。(前書き)

書いた後思った。

一人一人の視点が短い・・・。

「ご飯の恨み。そしてバグ認定。」

視点 霧弥

お、おおおおお！？

扉に入ったと思えば……。

何で俺は落ちてんのおおお！？

やばい、速度がやばい。落ちたら死ぬ。絶対死ぬ。

な、何とかしなければ！

えっと、えっと、……「あ、相川歩！」ドグチャ！「グハッ！？」

「な、何だよいった……あ、危なかった。ゾンビパワーすげえ。」

すまない歩よ。グチヨツとさせた上にセリフを切っちまった。

あ、何だよいった、までが歩でそこから先は俺だよ。

あのまま落ちたら絶対死んだ。俺はただの人間。

能力を使わなければただの人間。大事なことなので二回言いました。

ピラッ

ん？何だこれは？

えっと何々？手紙？神様から？

「お主のネギまの世界の原作知識はこちらの都合で消しておいたから。ガンバ」

なんだってー！……ちょっと待てよ……。

うん、やっぱり無理。ネギまって言う世界だってことと、アラルブラって奴のことしか思い出せない。

グウ〜。

やばい、腹減った。

視点 アルビレオ

ふふふふふ。こんにちは。アルビレオ・イマです。

今日の私たちの昼食は旧世界の日本の料理だそうです。

鍋料理・・・と言いましたか。

「じゃ、早速肉を・・・」

ナギは気が早いですね。

「あつナギおまつ・・・何肉を先に入れてるんだよ!？」

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。」

「トカゲ肉でも旨いのかのう?」

ゼクト、それは・・・。

「バツバカ!火のとおる時間差というものがあったな・・・。」

「あーうっせ、うっせーぞ。えーしゅん。」

ひよひよいつ

ナギは次々と肉を入れていきます。

それを止める詠春。たしか・・・。

「ふふ・・・詠春、知ってますよ。日本では貴方のような者を・・・鍋將軍と呼び習わすようですね。」

「ナベシヨーグン!？」

「つ・・・強そうじゃな。」

ナギとゼクトが驚愕に目を見開いています。

その時でした。空から少年が降ってきたのは。

視点 霧弥

俺があのあとどうなったか簡単に説明しよう。

いいか？かんたんにだぞ？

よし……実は俺……拾われた。

「うぐっ！？」

「霧弥！大丈夫か！？」

詠春が背中をバシバシとたたいてくる。

「んぐぐ……ぶはあっ！はあっはあっ……死ぬかと思った。」

シイタケがつるんって……。

「霧弥、なにやってんだよ。」

「大丈夫でしたか？」

「大丈夫だよ。」

・・・とまあこんな風にアラルブラに拾われて、鍋を頂いてます。

出合ったときに誰なのかがわかったから、アラルブラだって分かった。

ちなみに若返ってた。14歳くらいに。

「それにしてもなぜ空から？」

「いや、俺もあんまり意味が分からないん（ゴシヤツ）・・・だ？」

いきなり空から剣が・・・。あつい。鍋の中身が掛かった。飯食いそびれた。

・・・詠春なんて鍋かぶってる。ひどいなあ。・・・ふざけんなゴ
ラ！

「お食事中失礼！・・・（霧弥はここまでしか聞いてません。）」

お食事中失礼だと！？失礼だと思うなら待ってるよ！

「ハハハハ（フフフフ）俺の食事を邪魔する奴は（食べ物を粗末にするものは）・・・。」

「「斬る」」

まずは詠春が飛んだ。俺は飛べないから準備しとく。

あの筋肉ダルマをぶっ飛ばすため。

俺って筋力も一般人並だから。塗り替えしたらどうか分からないけど。

「お、詠瞬の攻撃凄いでるぜ。」

「あの大男、やりますよ。見た事があります。ちょっと前南で話題になった剣闘士ですよ。」

へー。そろそろ塗り替えするかね。

やっぱりご飯の恨みと言えばセイバーでしょ。

「塗り替え、セイバー。……食事の邪魔をする輩は許しません。」

こうして、俺の魂は塗り替えられた。

視点 詠春。

ガキキンッ

これで何度目かの打ち合い。

なるほど、この男、かなりやる。

「ちよっ！タンマタンマ。あんたマジでつええな。ちよいまたね？」

この男、何を……。

「ふざけるなっ。やる気なら本気をだせ貴様っ！」

「へっソースか！けど四対一だし本気出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜ！」チャッ

なんだ？カプセル？何が入っているんだ。

ポイツポイ。

何が出てきても大丈夫なように構える。

ポポンッ

「ブッ!？」

なななな、なぜ全裸の女性が四人も……。

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い。」

ぽよぽよ。

「ぐっ・卑劣な。いや、何のこれしき、心頭滅却すれば火もまた

「ゴンッ」「ブッ！」

「ホイー丁上がり。」

視点 セイバー

あの剣士、なかなかやりますね。

しかし、狸の置物で殴られて負けると言うのはどうでしょう？

いま、「保険」と言う札をつけた少女に殴られ、剣士が負けました。

情けないですね。私は女なので大丈夫です。・・・体は男ですが。

とにかく、いまはあの男です。あの男に制裁を加えねばならない。

私は男のいる高台まで飛びます。

「おっ？」

「我が名はアルトリア。食物を粗末にする愚か者に制裁を加えに参

上した。・・・参る。」

「あれ？こんな奴データになかったぞ？新参か？」

「余所見をしている暇が・・・あるのですか！」

エクスカリバーで横薙ぎに一閃。

ガンッ

「おっと、あぶねえなあ。」

折れた剣で止められました。やりますね。

「ハアアッ！」

エクスカリバーで切りかかる。

「やべっ、ぬぶん！」

「なっ！？」

地面を抉り取って石つぶてに！？

「はっ！」

横に飛び、かわす。まずい、距離が開いた。

「いくぜっ！ラカン・・・インッ・・・パクトオ！」

ものすごい量の気の奔流。これはさすがにまずい。ですが、私には防ぐ手段がある。

「全て遠き理想郷^{アヴァロン}！」

これが、私の最強宝具。聖剣エクスカリバーの鞘。アヴァロン。

この宝具はすさまじい治癒能力を持ち主に与えると共に、老化も停止させ、外部からの攻撃を完全に遮断する。

つまり、最強の防御です。

「なにい！？無傷だと！」

「それだけですか。ならば、次はこちらがいきます。」

私はエクスカリバーを構える。

「エクス
」

「大呪文か！？気合防御！」

「カリバーーーーーー！」

「へ？ちよっま、やばいつて。」

男を襲う光の奔流。その本流は容赦なく男を包み込む。

「ぐ・・・がああああ！」

・・・光が収まる。少し先には、男が立っていた。随分と傷を負っています。

「まだ立つ事が出来るとは、賞賛に値します。」

「へっ、強いながきんちよ。もっとやらね？」

「いえ、遠慮します。大分怒りも収まってきたので。あとは、ナギとでもやってください。」

「じゃ、そいつを倒して、もういっかいだ！」

「分かりました。約束します。では。・・・ふう。なあ、ちょっと頼みが。」

「へ？なんかいきなり雰囲気が変わったな。まあいいや。何だ？」

「あのさ・・・下まで、運んでってくれ「ガラッ」・・・へ？」

あああああ。おちる。

視点 アル（アルビレオ）

私たちは、詠春を介抱しながら霧弥の戦いを見していました。

ここまで声は届きませんが、霧弥が剣で戦っています。

正直、霧弥があそこまで戦えるとは思いませんでしたが。

あ、男が距離をとりましたね。大きいのを放つ気でしょうか？

霧弥は大丈夫ですかね？

「あれはまずいのう。」

「おや、ゼクトもそう思いますか。」

「あれだけの気が集まっていったら誰でも気づくと思うがのう。」

「それもそうでしたね。しかし、霧弥は大丈夫でしょうか？」

「まあ、霧弥はまだ子供だし、相手も手加減するじやろう。」

その瞬間、相手の攻撃が放たれました。

「……………あれは手加減しているのでしょうか？」

「……………手加減なしじゃな。」

攻撃は霧弥に近づいて行きます。

そして、攻撃が霧弥に当たった！……………と思った瞬間、攻撃は誰もいない方向へと飛んでいきました。

「いまのはなんじゃ？」

「反射・いえ、攻撃を霧弥に干渉させなかった感じですかね？魔法具でしょうか？」

「じゃが、それほどの魔法具ならもはや封印級じゃ。それほどの魔法具ならアルも分かるじゃろ。」

「そうですね、しかし、あれが何かは分かりませんね。」

「つまり、何らかの魔法か、いまだ発見されていない魔法具と考えたほうがいいのではないか？」

「そうですね、あ、霧弥も攻勢に出るようですよ。」

霧弥も、自身の剣を掲げ、振り下ろしました。

「エクス」

霧弥の魔力が剣に集中していきます。あの剣も魔法具でしょうか？

「カリバー……！」

霧弥の剣から、極大の光の奔流が放たれます。

「なんじゃあれは!？」

「霧弥もバグでしたか……。それに、エクスカリバー。たしか旧世界の……。」

調べてみましょうかね。

む、あれは・・・霧弥が落ちてきました。

上を見ると足元であったらろう場所が崩壊しています。

あ、地面に……。生きてますね。

さて、いろいろ聞き出しましょうか。

視点 霧弥

落ちていってしまったけど、無事生還を果たした。

スマナイ、歩……。

そして早々にあるとゼクトに聞かれたんです。

「あれはなんだったのですか（のじゃ）!?!?」

えっと、あれって？エクスカリバーとか？

「えっと、俺の魔法だよ。」

「魔法だったんですか？あれ。」

ええっと、もう能力の説明したほうが早くね？

「えっと、俺の魔法は魂の・・・（以下略）」

「つまり、先ほどの貴方は、英雄、アーサー王となっていた。それでいいのですか？」

「まあ間違いはないな。」

「他の人物にもなれるのですか？たとえば、アーサー王伝説のサー・ランスロットなど。」

「まあ、その人物の知識さえあればたぶん。ちなみに、アルにもなるうと思えばなれるぞ。」

「絶対にならないでください。」

そんなに嫌か？

「ゴホン、まあまとめると、後ろで戦ってる二人に加え、あなたもバグだと言うことですね。」

いや、どうまとめたらそうなるの？

それに俺はただの人間だから！バグじゃないから！バグじゃないから！大切なことなので（以下略

結局バグに認定されました……。とほほ。

「ご飯の恨み。そしてバグ認定。（後書き）」

えっと、今後使って欲しいキャラなどがありましたら、感想に願
いします。

戦争開始イイーーーー！
(前書き)

短すぎる……。ネタが……。

戦争開始イーーーーー！

皆さんこんにちは。霧弥です。

あのバカ筋肉もといラカンの襲撃から数日が経ちました。

俺とラカンは紅き翼のメンバーとなり、ナギたちと行動を共にしてきました。

ちなみに今は戦争中です。

最近戦争がよく起こるんですよ。

そこで俺たちの出番ってわけです。もういくつも戦争を鎮火させています。

殺した人数は1000から数えるのをやめました。

最初はビビったし超鬱モードになったりしましたが、もう慣れました。

ちなみに、僕も活躍してるんですよ。

相手の飛行部隊をバベルガグラビドンで一気にペシャンコにしたり。

ソーンウィップ！ワン！ツー！スリー！・・・したり。

IS乗り回したり。

カメハメハー！だったり。

まあ、いろいろとやっているのです。

前線に出ずに傷を負った兵士達の回復に努めたりもしてました。

で！今回はなんと前線ですー。わーぱちぱち。

「なあジャック。俺は何をすればいいの？」

あ、ジャックって言うのは馬鹿筋肉のこと。ジャック」・ラカン。

「まあ、いつもみたいに暴ればいいらしいぞ。」

「そうかいな。アル。俺はどうしたらいい？」

後ろから「俺の言ったこと無視！？」とか聞こえてくるけど気にしない。

「そうですね。敵の本陣はナギや詠春が行くので、霧弥は敵兵をこちらの陣地の入ってこないように食い止めてください。」

「ほら！おれの行ったとおり暴ればいいんだよー！」

「ジャック。全然違うからな。お前が言うと本当にそれでいいか心配になる。」

「ツチ！しょうがねえ。俺だけで暴れてくる！」

ジャックは飛んでいった。

「じゃあ、俺も行って来るよ。アル。」

「頑張ってくださいね。」

さて、今日は誰にするかね。

ちなみに、俺の人格でも魂としゃべることが出来るんです。

一つの魂ならば、俺の魂の横に置く感じで会話が出来るとだそうです。

よく出てくるのは、ギルガメッシュですね。きっと退屈なんですよ。

誰としゃべるかは、決められないそうです。

まあ、簡単に言えば、もう一人の僕！とか、AIBO！の奴と同じようなものですね。

というわけで、新しい発見だったわけです。

「A A A L a L a L a L a L a L a e i ! !」
アアアアラリリリライッ

戦場にはやっぱり戦車が似合うぜー！

こういう戦争ではF a t eの宝具がとても便利です。

そして今乗っているのは、第四次聖杯戦争、ライダーこと征服王イ
スカンダルの宝具。

ゴルディアス・ホイール。

二頭の神牛の引く雷撃を纏った戦車は敵のど真ん中につっ込み、敵
の陣営を次々と崩していく。

その姿はまさに蹂躞。征服王にふさわしいで光景ある。

敵陣営の半ばまで来たとき、イスカンダルが、俺の声で声を出す。

「ん？」

どうしたんだ？何か不具合でも？

「いやな、目の前に坊主の仲間がいるんだが、このままだと轢いて
しまう。」

かといって止まれば集中砲火を浴びることになるからな。どうする
か悩んでいた所だ。」

なるほど。どんな奴だ？つてか坊主って呼ぶな。

「やたらでかい剣を振り回しておる。」

なるほど。ジャックか。

なら轢いてもいいぞ。きつとバグだから平気だろう。きつと。たぶん。おそろく。

「わかった。多少は手加減するから何とかなるだろう。」

じゃあ、がんばって。

「ほらほら！避けぬと危ないぞ？ジャックとやら！」

「ほへ？霧弥？つて、ちよつと待てえええええ！のわあああああ
あ！」

まずはじめに二匹の神牛による蹂躪。

そして、本命の戦車チャリオットによる蹂躪。

それを終え、通り過ぎた後、後ろを向くとまだ生きていた。

体が原形をとどめている時点でものすごく手加減をしていることが分かる。

おそらく、攻撃に回す力を、速度に回したのだろう。

なら、生きていてもおかしくはない。それでも並の人間には十分脅威だが。

後で謝らないと。

て滅ぼしてくれる！」

いや、戦を仕掛けたのはどっちかというと俺らの方……。

背後に王の財宝ゲートオブパンドラが展開される。

そこから顔を覗かせるのは……無数の宝具の群れ。

その宝具は一気に敵の頭上へと降り注ぐ。

しかもすべてが宝具。ともなるとただの人間に防げるわけもなく、宝具の群れは次々と人を切り裂く。

そしてブルーアイズと、宝具によって大きく戦力の削られた相手の陣地に味方の軍が突撃する。もはや勝負は決まった。自分達の勝利で。

ナギたちも遠くで暴れている。ジャックなどは戦艦すら切り落としながら猛進している。

鬼神兵は、大方かたずけておいたので、詠春もゼクトもアルも、阻むものなどない。

味方の軍も、それを見て士気が上がり、敵陣に突入している。

自分の兵力。相手に兵力。陣形に地形。

その全てを把握し、味方の活路を開くことが出来るように宝具を放つ。

それが的確に行えた事で、兵士一人一人の負担が激減する。

まさに、戦場を支配していたのは、ギルガメッシュだった。

って言うか酷くね？ fateの宝具って。

戦争開始イーーーーー！
(後書き)

ネタがなくなってきた。

主に使うキャラとかキャラとか。

頑張らないと。まだ見てないアニメも見ようかな？

何度も言うが俺はただの人間なのだby霧弥（前書き）

更新遅れました。すみません。

感想や、アドバイスなどは常時お待ちしております。

なぜか更新しても、他のユーザー様から見ると更新されていないという事態が起こったので、一度四話を削除し、もう一度更新しなおしました。

何度も言うが俺はただの人間なのだby霧弥

グレートブリッジを争奪してから少し経った今日。

新たにガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグらを仲間に加え、俺たちのファンクラブができ、俺に二つ名が出来たりと、いろんな事が有ったここ数日。

ちなみに俺の二つ名は、『悪魔の多重人格者』や、『戦場の殲滅悪魔』や、『青眼白龍の主』とかだ。妙に悪魔とかが多いのは不服だけだ。

それで、ガトウは実力も然ることながら情報収集に長けているところがあり、そのガトウが持ってきた情報により連合、帝国。両方の国の中枢まで手を伸ばしていると言う秘密結社、『完全なる世界』「スモ・エンテレケイア」の存在が判明。

そして今、協力者にあってほしいといわれ、メガロメセンブリア本国の首都に来ていた。いろいろ端折ったが、まあ、今の状況はこんな感じだ。説明が下手ですまない。

「で、協力者って誰なんだよ？ガトウ。」

「まあ、焦るな霧弥。じきに来るはずだ。」

ふ〜ん。・・・あれか？あの人は確か・・・

「マクギル元老院議員！」そう、それぞれ。良く分かったな。詠春。

「あんたが協力者か？」

いや、敬語くらい使おうぜ。ジャック。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。」

カツカツと、音が聞こえてくる。あー。なんか緊張してきた。

俺も緊張してきた・・・。

ちくしょう！役にたたねえ！何で今出てくるのが歩なんだよ！？
なんだ！？いつも盾に使ってる仕返しか！？そうなんだな！？
出来ればもっとこういう場面に強そうな奴であってほしかった・・・。

そこまで言われるとちょっと凹むな・・・。

凹んでやがれ！ 八つ当たり

でででで、だ、誰が来るんだ！？

「ウエスペルタティア王国王女・・・アリカ様だ。」

大物キターーーー！や、やばい・・・意識が・・・。

お、オイ！意識失うとかマジやめろよ！どんだけ緊張してるんだ

！

いや……でも……意識……が……。

しょうがない！俺が出てやる！ドチクシヨウ！

その言葉を最後に俺は意識を失った。

俺が意識を取り戻したのは、意識を失ってから数時間ほどたってからだった。

お？起きたか？よかった。さっさと変われ。俺は疲れた。

分かった。助かったよ。ありがとう。

「……つと……。」

ふう、まさかあんなことになるなんて……。

何度も言っつが俺はただの人間なのだ。ナギ達と同じにしてもらっては困る。

さて、皆はどこだ？あつちかな？

・・・居た居た。

「おーいアル！」

「おや、霧弥。目覚めたのですね。」

「おう。俺の精神は弱かったようだ。」

「そのようですね。」

そんなあつさり肯定してください・・・。

「そうそう。霧弥。貴方の半生を「ワハハハハ！」・・・この話はまた今度。」

「あ、ああ。で、なに？あいつら。また殴り合いでもしてるのか？」

建物の影から覗いてみる。そこには、ジャックとナギが居た。

「上手いことやりやがって！こんガキヤ！」

「ああ！？何の話だよ！？」

「とぼけんじゃねーよ！お姫様とイチヤイチャワイワイお喋りして

「たろーが！」

「してねーっつの！何がイチャイチャだ！！」

「なーに言っつてんだ！俺なんか・・・」

『気安く話しかけるな。下衆が。』

「だぜ〜〜〜？・・・いや、ありゃいい女だぜ。一本芯の通ったな。」

「頭大丈夫かジャック？マゾかあんた？俺あんなおつかねえ女見たことねえぞ。」

「グハハハハハハハハハ！そーゆートコはまだまだ可愛いガキなんだよなてめーはよ。」

「んっだそりや意味わかんねえ。触んなっつーの！勝負すっか？てめ。」

ギヤイギヤイ

こんな感じだ。なにやってんだか。

「仲いーな。あいつら。」

「おう！？詠春！？いつからそこに！？」

「さつきから居た！気づけよ！」

「すまん。詠春スマン。次からは気をつける。」

「それもつ何回も聞いたセリフなんだが!？」

まあまあ、そんなとこに拘るなよ。

そして詠春、アル。頼むからあいつら止めてくれ。町一つ消し飛ばす。

あれから数日………ナギがまたやらかした。またやりやがった。胃が痛い。

なんか外で襲われたらしい。それだけならまだ良かった。こいつは死なないだろうし。

しかし、問題はそこからだ。まさか……まさか、アリカ姫を連れて敵の基地を壊滅させるとか……。なに考えてんだあいつは!

「お前はなにやってんだこのアフオ!」

「ぐふぁ!」

どうよ。俺だって魔法使えるんだよ!アルに身体強化位教わってる

わ！

「で、でもよ！姫さんもノリノリだったぜ！？」

「うそこけっ！」

「グボア！」

本当に何を考えて「詠春さん！霧弥さん！」何だタカミチ。

「あの怖い冷血なお姫様が今、僕に向かってにつこり……。僕びつくりしちゃって……。あ、なんか

ナギさんに御礼を伝えて、だそうです！確かに笑いましたよねっ！？」

「う、うむ。驚いたのじゃ。」

「ハ……。……。？」

「な？……。それに……。証拠も見つけてきたぜ。」

「それは……。！」

そこには、メガロメセンブリアナンバー2である執政官と、完全なる世界との関わりの証拠があった。

俺達はその証拠のことをマクギル議員に話した。

そして議員に呼び出され、マクギル議員と二度目の対面を果たしていた。

「ご苦労だった。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……法務官はまだいらっしやいませんか。」

「法務官は……来られぬこととなった。」

え？

「あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ。水を挿すのもどうかと思ってるね。」

おかしい。何か違和感を感じる。アーチャー。どう思う？

私が思うに、あれは本物ではないな。先日見た彼からは何の力も感じなかったが、今の彼からは強大な力を感じる。たとえ先日は隠していたのだとしても、少しくらいは分かったはずだ。おそらく、彼は偽者だろうな。本物は……既に諦めたほうが良いだろう。

ありがとう。さすがアーチャー。

ふっ。礼は必ずしてもらおうぞ？

ああ、わかったよ。一日体を貸してやるよ……。じゃあ、アーチャー。頼んだぞ。

俺は気づかれないように、アーチャーに体を委ねる。

それに気づくこともなく、議員は言葉を紡ぐ。

「いや……。その……。私の意見ではない。そう考える物も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君たちも無念だろうがここは手を……。」「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）」「なっ!?!」

ドスツと、議員の腹に螺旋状の剣が突き刺さる。

「プロトクンファントasm
壊れた幻想」

そしてその剣に秘められた膨大な量の魔力が爆発する。

これにより議員の体は吹き飛んだ。

「ちよ、おま！霧弥！なにやってんだ！」

「いや、詠春。霧弥は間違ってるねーぜ。見てみるよ。」

「やはり君は気づいていたか……。来るぞっ！」

視点アーチャー

爆発により起きた煙が晴れる。

そこから口元に笑みを浮かべた青年が出てきた。顔はまあ、イケメンと言わざるをえない。

イケメンは滅びればいいんだ！

「同感だ。」

イケメンなど滅びてしまえ。硫酸の中で溺死しろ。

「・・・良く分かったね『悪魔の多重人格者』。今日はどんな人格なんだい？」

「その呼び方はやめて欲しいのだが。そして私のことはアーチャーとでも呼ぶが良い。」

多重人格なのは霧弥であって、私は多重人格などではないのだからね。

「ちなみに、マクギル議員はもうメガ口湾の底だよ。」

その言葉を聞くや否や、ナギがその男に飛び掛った。

「オラア！」

私ももう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つために投影を開始する。

本来ならばもう少しペースを考えながら投影をしなければならぬ。それは魔力が尽きてしまうからだ。

しかし、この世界の空気中には結構な量の魔力があるし、元々居た世界よりも魔力自体の密度が濃い。

それにより、魔力の消費を少なくして投影が出来る。

しかし込める魔力の量は同じなため、壊れた幻想ブローケンファンタズムの威力を害することも無い。私にとっては良い世界だ。

「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！」

男に向かって偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を放つ。もちろん、ナギに当たらないようにもするし、後から戦闘に参加するであろうガトウやジャックにも当たらないようにする。

角度は完璧。速度も威力も問題ない。おまけにこちらは死角だ。

当たれば死には至らなくとも致命傷にはなるだろう。そこで壊れた幻想ブローケンファンタズムを使えば確実に仕留められる。

まあ、それは敵側に仲間や特殊な能力が無かったらの場合だ。

・・・そして案の定・・・敵の仲間は現れた。

「やらせませんよ」

敵の一人が水で偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を飲み込む。

壊れた幻想を発動はしたが、爆発ははるか遠くで起こった。

「くらえ」

そしてもう一人が炎で私とナギたちを攻撃。

ナギたちは平気そうだ。私はこれでも英霊。あの程度の炎ではやられはしない。

「強えぞ奴ら！」

「ハッハ。だが、生身の敵だ。政治家だなんだとガチ勝負できない奴らに比べりゃ……。」

ジャックがアーティファクト千の顔を持つ英雄により大剣を出す。

「万倍！戦いやすいぜ！！」

「フ……。」

しかし男は攻撃どころか逃げる気配も無い。ただ、薄ら笑いを浮かべている。

何か策があるのか？

「わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ、反逆者だつ……」

「げ」

「やられたな。」

・・・まさかマクギル議員の声を使って外に連絡するとは……。

これで私たちは立派な犯罪者だな。ナギよ。食料の貯蔵は十分か？

もう一度偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を投影する。

ナギたちも敵に肉薄する。

だが、予め詠唱を終えていたのか、男の放つ石の槍によってその攻撃は阻まれ、逃げられてしまった。

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）は数本ある石の槍の三本を破壊し、
ブローケンファンタズム
壊れた幻想により二本を破壊したが、敵には届かなかった。

「くそっ！」

ナギが八つ当たりに壁を殴る。

元々壊れかけていた壁は無残にも崩れ去った。

「あゝあゝ。これで俺たちや犯罪者だな。まあ、人生波乱万丈なほうが面白いってもんよ」

「そんなに軽いことじゃないぞ。これで俺達は連合と帝国の両方を

敵に回した事になるんだからな。」

冷静にガトウが言う。

だがそれが原因となって場が静寂に包まれる。

その静寂を破ったのは、足音だった。

「居たぞっ！ 奴らを捕まえろ！ もう全国に報告済みだ、逃げ場は無
いぞ！」

くっ！ 連合の兵士か・・・！

「やべえっ！」

「今の所は逃げるぞ！ タカミチたちは・・・ゼクトとアルに、詠春
も居る！ 何とかなる！」

「皆。霧弥のいうとおりだ。一先ず逃げるぞ！」

ガトウが天井を無音拳で破壊する。これで何とか足止めになるだろ
う。

その隙について俺達は破壊された窓から脱出した。

やれやれ。昨日までの英雄が一転して犯罪者か・・・。

なんかやばいことになったな・・・。

他人事だと思って・・・言っけて置くが今の私の姿は君だぞ？ つまり犯

罪者は私ではなく君だ。

あっ
・・・

地獄の修行／気に入られた霧弥（前書き）

どうも。まりもです。

今回、先に『神なんて嫌いだ』を投稿しようと考えてたのですが、アイデアが浮かばなかったのでこちらを投稿することにしました。今回は戦闘がほんの少しだけ入ります。

・・・今見てみるとテオの戦闘がグイバン一番多いような・・・。
感想、アドバイスなど頂けると嬉しいです。

また、このキャラを使ってほしい！などのご要望がありましたら感想で。

できる限りの事はやりたいと思います。

ちなみに作者が使いたくないのは、ワンピース、ブリーチ、ナルト、トリコ、等です。今思いつく限りでこれだけ。（これは作者にもどうしようもありません。）

こんな作者ですが、どうかよろしくお願いいたします。

地獄の修行／気に入られた霧弥

「俺に稽古を付けてくれ。」

……この一言から……俺の悪夢は始まった……。

俺達は帝国、連合から終われる身になった。

そろそろ、自分の身を守るくらいの実力は付けないといけないと思っ
思っ。

普段から色々なキャラに教わってはいるのだが、やはり体は一つし

かないため効率は悪い。

そこで詠春に鍛えてくれと言ったのだが……

『詠春、俺を鍛えてくれ。』

『別に良いが、なぜだ？』

『いや、自分の身を多少は守れるようにしたいな……と。』

『オーイ！何の話してんだー！』

『霧弥が鍛えてくれと言って来た。』

『なるほどなあ。よし！この俺様が鍛えてやる！』

『いや、ジャック。俺は詠春に……ま、待て！し、死にたくない
』！』

『ハツハツハ！安心しろ！八割殺しで終わる！』

『せめて半殺しで！……いや！それも駄目だ！……あああ
ああああ！』

『む、まあ、がんばれ。生きて帰って来い。』

……それから毎日。逃亡の合間に修行という日々が続いた。

あゝあ。早くアリカ王女を助けに行きたいな。そうすれば修行も無くなる……と思いたい。

そして今もレッツ修行タイム。

「オラオラア！避けないと死ぬぜ！」

そう言いつつ大剣をブンブンと投げってくるジャック。

なんちゅー人間砲台。死ぬわ！

「くっ！」

俺は頭上へ高速で光の文字を描く。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

言い終わると同時に一気に加速する。この魔法は便利だ。

消費魔力が少ないし、それでいて身体強化においてはこの世界の魔法より強力。

やはり世界が違うと色々違うらしい。

兎に角、大剣を全てかわし、ジャックとの距離を多少詰める。

「求めるは雷鳴・稲光^{イステ}！」

魔法を放つ。これもこの世界のものではない。

ちなみにこの魔法には人一人を消し炭に出来るくらいの威力がある。

それを容赦なく放つ。……しかし……

「おー、あぶねえあぶねえ。」

なぜぴんぴんしているのだろうか、こいつは？化け物じゃないのか？

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

こいつがぴんぴんしているのは何時もの事なので追撃する。

頭上に光の狼のような物が現れる。そしてその光は全てジャックに襲い掛かった。

「ラカン適当に右パンチツ！！！」

ドカアアアアン

……もう言葉にならない。何だあれ？パンチ？パンチで粉碎したのか？

有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ。有り得ない。不可能だ……

ああもう！チクショウツ！

「求めるは閃光・光燐！」

魔方陣を描き魔法を放つ。

これは稲光を更に強力にしたもので、殺傷能力は段違いに高い。

更に追尾のおまけ付き。さすがにこれなら……

「いって……結構効いたわ。こりゃ。」

うわああああああ！全然効いてねええ！

「じゃあ今度はこっちから……行くぜっ！」

「ふっ、がふっ。」

おい、大丈夫か？変わったほうがいいか？

歩が声を掛けてくれる。良いゾンビだな。

「いや、まあ大丈夫……」

ジャックの奴やりたい放題やりやがって……。

！？

いや、まで。あのジャックから自力で生還できたんだ。

俺ってひよつとして強くなってる？え？なんか嬉しくなってきた。うわっほーい。

それにしても伝勇伝の魔法は使いやすい。

様々な属性があり、発動までの時間も短い。

実は魔術も使おうと思っていたのだが、まず魔術回路が無いということ进行し断念。

この世界の魔法はアルに教わっている。まあ、余り使いたくは無いが。

なぜかと言うとまず詠唱が長すぎるといふことがある。その詠唱の間に稲光がどれだけ打てるかと考えると、効率が悪い。

まあしかし、千の雷や燃える天空などの高威力の魔法は覚えて置いて損は無い。

だからアルには、稲光や光燐以上の威力の魔法を覚えてもらった。

まあ、千の雷はナギに教わったが（教え方が下手すぎる。気合でどうにかなるってどう言うこと？）。

まあ、そんなこんなで今日もボロボロだ。しかし、悪いことは重な

る物で……

「ジャック！霧弥！姫さんを助けに行くぞ！準備しろ！」

「い、いや、待ってくれ……せめて少し休憩をだな……」

「いいじゃねえか霧弥！修行の成果を試せるぜ！」

いや、そう言われてもな……。

いや、でも確かにいい機会ではある。初めて自分の力で戦うのか……。

「……しゃーない。行くか……。」

幸い、骨までは折れてない。大丈夫だ。

「求めるは雷鳴・稲光！」

目の前の敵を稲光で倒す。うむ。やはり使いやすい。

しかしジャックめ・・・俺を夜の迷宮の裏側に放り投げやがって・・・。

なにが『そつちは任せたぜ！がんばれよ！』だ！

ほら、さつさと行かないとまた敵が来るわよ！

いや、でもなアリア。こんなところに俺をブン投げたジャックへの仕返しを・・・

そんなの関係ないのよ！さつさと行く！風穴開けるわよ！

俺の中に居るのにどうやって風穴開けるって言うんだ・・・？

しかし・・・なぜアリアなのだろうか？

なぜか場に合わない奴が出てきたりするのなぜだ？皆目解からん。

まあ、怖いので先へと進む。

「我・契約文を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す」

身体強化を掛け、一直線の長い通路をひたすらに走る。

敵はいない。先程の奴等で最後なのだろうか？

と、目の前に壁が現れる。行き止まりだ。

「うわ・・・行き止まりかよ・・・。」

そういつて引き返す。しかし、その足は次ぎの声によってとどめられる。

「バカ！さつさと壁をぶち壊しなさい！」

「何でだよ。」

あんたねえ・・・なんで行き止まりなのに敵が居たのよ！？この先に何かがあるからでしょうが！ほら、さつさと壊す！

「・・・・・・・・あー！そうか、すまん。助かった・・・。」

そついい、壁のほうを向く。

「求めるは雷鳴・稲光」

弱めに放った稲光で壁を壊す。

「妾達に何をする気じゃー！」

「いぶうっ!？」

壁の向こうからようじ・・・少女が出てきて殴りかかってきた。

それを顔面で受ける。って言うか避けられなかった。

「いっのっのっ！どーせ妾達をまたどこかへ連れて行くのであつうっ
「！」

ドカツバキツ

「ゴパツ!?メパア!?!」

何よこの子……ってその子へラス帝国の代三皇女じゃないの!?

なんだってー!?!そりや凄い大物にゴフウ!

「……霧弥……じゃったか?助けに来てくれたのか?」

「あ、アリカ王女!そうですよバツ!助けにブツ!来たんですバア!?!」

「そうか……ナギではないのだな……(ぼそっ)」「
ん?なるほど。そういうことか。」

「ナギがもうすぐあちら側から来ると思いまげラツ!?!」

「!?!そうか!そんなのだな!?!」

なんか元気になって向こうへと向かうアリカ姫。もうナギが大好きなんだね。

「それにしてもブルア!やめてくれないゴフツ!か?」

痛い。身体強化していても痛いものは痛い。

「む……まあ、敵ではないようだし、許してやるのじゃ。その

代わり妾も連れて行け」

え……？戦争してる敵の国の皇女を連れて行けと？いや、まあいいけどさ。」

そこっ！ロリコンとか言わない！言わないで！頼む！

「じゃ、じゃあ早くこっちに來い連れて行くから。オイ詠春。一緒に来てくれ。」

「なぜだ？霧弥一人で十分だろう？」

「あれだよ。あれ。」

助けに來たナギとアリカ姫を指差す。いい雰囲気だ。リア充爆ぜろ。

「……なるほど……分かった。」

「おい、何が分かったのじゃ？」

「いや、なんでもないなんでもない。」

子供にはまだ早い。

ひー。イチチ。顔の傷が痛い。くそ。テオ（そう呼べと言われた）め。容赦なく殴りやがって。

あの後隠れ家に戻った俺はずっとテオの遊び相手をしていた。

しかし・・・ことあるごとに顔面を殴るのはやめて欲しい。

実際かなり痛いし、腫れるし、何よりも幼女に殴られるって言うのが精神的に響く。

だってほら。無邪気に笑いながら本気グーパーだぜ？

でもテオに悪気は無いんだよなあ。だから頭ごなしに叱るって言うのも・・・。

だから出来るだけ平和に遊べるトランプをした。

大富豪、七並べ、神経衰弱、スピード、ばば抜き、などなど・・・。

神経衰弱などテオが気に入ってしまつて・・・。神経が衰弱した。

そしてそれからやたらと気に入られて・・・。

最終決戦までテオの面倒を見るとか言われて・・・。

断ったらシバくって言われて・・・グスン

面倒を見たら見たで殴られるし……。いや、最近は大シになってきた。

髪を引っ張る程度だ。まあ、ジャックの入れ知恵でろくでもない事も覚えたのだが。

鬼ごっこをすると砂の入った球を投げてきたりするし……。

それぐらいならまだいい。だがジャックよ。股間への攻撃は教えるべきじゃないぞ。うん。

いきなり後ろからセコイ蹴りを入れられたときは驚いた。

もちろんジャックは能力をフルに使ってぶっ飛ばした。皆よくやってくれた。

「あはははははははは！霧弥！次は何をしようかの？何か面白い遊びはないのか！？」

「うん？何かあるかなあ……？」

カードゲームなら遊戯王やバトルスピリッツが思いつくが却下。

仮にもテオは皇女な訳だし……教育に悪そうだ。

「じゃあ……宝探しでもやるか！いいかテオ。この宝石を隠すから、それを見つけてることが出来たらテオの勝ちだ。宝石もあげよう。やるか？」

これは夜の迷宮で見つけた宝石。深い青色に輝いていて、とても綺

麗だ。

え？こんな子供に宝石あげるの？勿体無いわ！私に・・・

万年金欠魔術師がなにか言ってるが無視していいと思う。

「おお！妾がすぐに見つけてやるわ！」

「じゃあ隠すから待ってるよ。」

さうて。どこに隠そうかな。

五分後

「見つけたのじゃ！」

くっ！こんな子供に宝石なんて・・・

あちゃ〜。見つかったか。

トイレトペーパーの芯の中なら見つからないと思ったんだがなあ・・・

テオは凄い。こういうゲームが超得意だ。本当に皇女なのか？

いや、まあ皇女だからこそ・・・かもな。

ずっと王宮で過ごしてきて堅苦しい教育を受けてきたんだろう。
そりゃなんの縛りもない外は楽しいだろうな……。

「よしよし、凄いなテオは。」

撫でる。頭を撫でる。こつするとテオが喜ぶ。

「うへえ……」

顔を綻ばせて笑う。しょうがない。もう少し相手してやるか。

「じゃあ、次は……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0780w/>

無限の魂を持つ転生者

2011年11月27日02時56分発行